

鹿児島県立与論高等学校

校長通信

第13号 (令和7年6月30日/校長 大倉秀心)



校訓「好学 創造 親和 不屈」

鹿児島県大島郡与論町茶花1234番地1



電話 (0997) 97-2064

FAX (0997) 97-2844



大満喫、台湾修学旅行

6月23日(月)から4泊5日(沖縄1泊を含む)の日程で、本校2年生の台湾修学旅行が行われました。昨年度初の海外修学旅行に引き続き2回目の海外になります。

先輩たち(現3年生)から昨年度の修学旅行の話を聞いていた人も多いと思うので、心なしか昨年度よりも生徒の皆さんは出発前から落ち着いて行動できていたという印象を持ちました。学校としても2回目ということもあり、業者との打ち合わせ段階からスムーズに準備が進められました。事前に数回、学習会が開かれましたが、業者以外でも大学時代中国語専攻の加治教頭先生が「修学旅行のための中国語」講座を開いてくれたりして、現地を訪れる前からいろんな意味で心の準備もできていたことと思います。

旅行中、健康を害したり、事故にあったり、トラブルに巻き込まれたりすることなく、無事に旅行を終えられたのは、このような事前の準備ができていたからだということを忘れないでください。皆さんの修学旅行に関わってくださった全ての方々への感謝の気持ちをしっかりと持ってもらいたいと思います。

今回の修学旅行で昨年度と大きく違っていった点の一つが、台湾入国時の入国カード、日本帰国時の税関申告書が全てスマホでのオンライン入力で済ませられるという点でした。昨年度時点では手書きで紙による提出でしたが、事前のオンライン入力になることで、空港や機内で慌てることもなく、スムーズに出入国できる点で、引率する側としても安心感が増しました。この辺がデジタル化の利点なのでしょう。

煩雑な手作業が一つ減るだけでも、国境をまたぐ移動のハードルが低くなり、皆さんが外の世界を見ようとする機会が増えるのではないかと期待しています。

「五感」から何を学ぶか

海外に行くといつも感じるがあります。眠っている「五感」が刺激されることをひしひしと感じるのです。普段日本で生活している時には経験できない場所に身を置くわけですから、当然といえば当然なのですが、改め

て海外にいる自分を感じるとき、今まで眠っていた「五感」が喜んで活動し始めるような感覚に陥るのです。

機内や空港内のアナウンスは、中国語・英語・日本語で行われていました。中国語は理解できませんでした。英語のアナウンスで何を言っているのかを理解しようとする中で、リアルな世界での英語のリスニングの練習を楽しむことができました。管理職になってからは授業から遠ざかっているもので、錆び付いた英語力を磨き直すいい機会になりました。

街を勢いよく行き交う自動車やバイクの数の多さ、それに伴う喧噪などは、与論はもちろんのこと日本の都会でも感じることはできないものでした。道路交通法が日本とは違うはずなので、どれが違反行為になるのかは分かりませんでしたが、日本ではすぐに警察に捕まってしまう単車の二人乗り(三人乗りもありました)や、単車と自動車と同じ車線を隣同士で猛スピードで走る様子などは、見ているこちらがヒヤヒヤするほどでした。しかしなぜか悪質性は感じられず、むしろ元気に「生きている感」が感じられ、人々がタフに見えるのです。我々が宿泊したシーザークホテル横の台北駅周辺も開発が更に進んでおり、新たな商業ビルが2つ建設中でした。この様子を同じバスの中で一緒に見ていた田中先生とは、「街の活気がすごいね。活気という点では日本は負けているね」と話した次第です。



(街の喧騒)

海外では特に嗅覚と味覚も刺激されます。台湾では様々な料理に香辛料の「八角」が用いられています。最初はその独特の風味に違和感を覚えますが、慣れてくるとあの風味がないと物足りなく感じるほどです。あくまでも個人的な感想ですが、皆さんはどうでしたか。

台湾ではファミリーマートやセブンイレブンなど日系企業のコンビニが無数に存在しますが、入店するとまず驚かされるのが、その独特の匂いです。その匂いの正体は店内で販売されている煮卵「茶葉蛋(チャーイェダン)」です。ゆで卵の殻にひびを入れてから茶葉や醤油、香辛料(八角など)とともに煮込んだもののようですが、これも日本では嗅いだことのない独特で強烈な匂

いなので最初は戸惑いますが、慣れてくると「これこそ台湾!」という気がしてきます。

匂いという観点では、日本は刺激がありません。というよりも匂いに対する拒絶反応が異常なくらいに強すぎると感じます。

日本に帰国して私が一番強く感じたのが、日本の「無臭」感です。匂いが「ない」。「変なおいがしない」「臭くない」といえば聞こえはいいのですが、何か生活感が感じられない、「生きている感」がない。

テレビのCMを見ても、「消臭」や「香りづけ」に関連した商品であふれかえっています。日本は街や公衆トイレの綺麗さは世界一だと称賛され、それ自体は誇るべきことだと思います。しかし、生活する上で生じる様々な匂いを極限まで排除し、「無臭」状態の中で生活することに慣れてしまうと、それこそ「生きている感」を失った人ばかりになってしまうのではないかと心配になります。

「校長先生、余計なお世話です。」と言いたい人もいるかもしれませんが、でも、そうであるのなら、台湾のコンビニの匂いに鼻をつまんでしかめ面をするような、異文化に対するリスペクトに欠けるような人だけにはならんでももらいたいと強く願います。

戦争を通して見る台湾と日本

今年は第二次世界大戦の終戦から80年の節目の年にあたります。このような節目の年に、戦争の記憶を改めて振り返り、平和の大切さを再認識することは大切なことだと思います。

皆さんは「旧帝国大学」という言葉を聞いたことがありますか。戦前に設立された帝国大学のことを指し、現在では日本を代表する難関国立大学となっています。具体的には、北海道大学(1918年設立)、東北大学(1907年設立)、東京大学(1886年設立)、名古屋大学(1939年設立)、大阪大学(1931年設立)、京都大学(1897年設立)、九州大学(1911年設立)の七つの大学を指します。

この「旧七帝大」に加えて日本が統治していた韓国と台湾にも、それぞれ京城帝国大学(ソウル市:1924年設立)、台北帝国大学(台北市:1928年設立)があったことを知る人はあまり多くはありません。私は皆さんがB&Sプログラムで大学生たちと観光している間、戦前の日本が海外に作った大学が今どんな雰囲気になっているのかを感じたくて国立台湾大学(旧台北帝国大学)を訪問しました。(国立台湾大学正門前)



正門前で守衛さんに許可をもらいキャンパス内を歩き回りましたが、学生たちが自転車でキャンパス内を移動するほどとにかく敷地が広大でした。歴史と風格を感じさせる校舎には威厳がありました。広い図書館にも興味があったのですが、学生・教員以外の立ち入りはできず諦めました(エントランスまでは入りました)。道を尋ねた学生さんにもこやかに対応してくれて、「台湾のために、世界のために頑張ってくださいね」という思いを強くしました。しかし、戦前はここが日本の大学であったことに複雑な感情を持ったままキャンパスを後にしました。

帰国後、那覇のホテルの部屋に入って何気なくつけたテレビの夕方のニュース番組で、80年前の戦争で日本の統治下にあった台湾では20万人を超える現地の人たちが「日本人として」戦地に赴いたことが特集されていて思わず見入ってしまいました。

かつての祖国・日本への複雑な思いを語る台湾出身の元特攻隊員の男性(陳金村さん)を、元日本兵を研究している若者(陳柏棕さん)が取材します。

日本政府からは、一部の戦没者らに弔慰金が支給されたが、陳さんら元日本兵のほとんどに戦後補償はないという。

【陳金村さん】「なんだか日本に見捨てられたみたいな気がする。同じ海軍、日本海軍よ。同じ日本の震洋特攻隊よ。みんな日本人は恩給をもらっている。台湾はどうして? 慰問の手紙一枚もないの。僕らね、本当に日本に力を尽くした。日本人として日本に背いたことはなかった。」

台湾では民主化が進むまで日本統治時代を学ぶ機会が少なく、戦争の記憶が引き継がれてこなかった。

【陳柏棕さん】「日本の人たちに元日本兵の理解を期待する以前に、まず私たち台湾自身、若い世代が理解していないんです。戦争は決して遠い過去のものではなく、私たちのすぐ近くにある現実です。私の力は限られていますが、できることを精いっぱいやって、より多くの人に『戦争は命を奪う現実』と知ってもらいたい。」

5月には台湾沖で中国による軍事演習が行われた。台湾有事が懸念される現状に金村さんは警鐘を鳴らします。

【陳金村さん】「戦争がどんなものか分からないんだよ...。だから今、台湾の政治もそうになってきてるんです。戦え戦えと。戦争っていうものはね... 人間の地獄だよ。」

皆さんはどう感じますか。